

音楽と私

千葉SE・四街道SE 寺岡哲子

私は子供の頃、体育会系の子供でした。運動会が好きで順位がつくものには燃えました。朝礼の時のラジオ体操は、朝礼台の上でした。白黒付けずにおれない、単純明快な子供でした。いつも大声を出しているので、声はがらがらで、歌どころではありません。

そんな私ですが、大学生になる頃には、女らしさも出てきました。毎日通う電車から見える「代々木ギター教室」という看板につられて教室の門を叩きました。しばらく通っているうちに先生の趣味のハミリのモデルになっていき、出来た映像に、私の歌声と数人の生徒のギターの演奏を入れるようになりました。ギターより歌に流れていきました。これが私の、音楽に触れた最初と言えるでしょう。ギターはコードで弾き語りをするに留まりましたが、青春時代の大切な楽器でした。

時は流れ、20代も終わる頃、娘のピアノに合わせて私は声楽を始めました。お決まりのイタリア歌曲上下巻、トスティと進み、発表会に緊張に声を震わせながら出演し、ピアノも習うこととなり、これも指を震わせながら演奏しました。

そんな時、中国演奏旅行を控えたTCT（Tama chorus theater）というミュージカルグループが歌手を募集しているという聞き、応募しました。私を中国へ連れて行ってくださいました。歌の幅を広げようと代表から言われ、荒井基裕先生（カンツォーネ界の重鎮、現在92歳）や、青木フキ先生（プロ歌手）を紹介され、レッスンを受ける事となりました。

そこからは快進撃。水を得た魚のごとく新しい生活が始まり、楽しく忙しい日々を過ごす事となりました。あちこちのライブハウスでたくさんステージを持ちました。カンツォーネ、ラテン、シャンソン、タンゴと幅広く歌っていました。この時代が、いちばん私らしい充実した日々でした。この頃は、声もよく出ていました。まさに、脂が乗った時期でした。

そして時は流れ、主人が定年になり、四国に常任顧問で来ないかという話があり、四国へと旅立ちました。そこでも私の好奇心は留まる事はありません。高松短大の音楽科でAO入試なるものがあり、学びたい意志さえあれば入ってくださいというものでした。私は声楽科へ入りました。もう声は下降線をたどっていましたが、そこの学部長が、女性のViolinistで、私に「副科でバイオリンなさいませ

な」って誘って下さり、のりました。毎日ピアノバイオリンオペラアリアという日々が始まりました。

2年はあっという間に過ぎ、また先生から「研究科へ入りなさいませな」って言われて、それを主人に話しました途端、東京へ帰ると言われました。危険を感じたのでしょうか。そして四国を後にしますが、四国での田舎生活になじんだ私たちは東京の生活に魅力を失っていました。東京の家を借りてくれてる人が、もう少し住みたいという事でこれ幸いに、東京に仕事に出られる距離の市原の山の中に住居を移しました。

そしてそこで『定年時代』に載った千葉SEの演奏会のお知らせの記事を見たのです。いさんで聴きに行きました。そして、千葉SEに入れて頂きました。嬉しかったですよ。だって、バイオリンで演奏に参加できるなんて、夢のまた夢でしたから。なのに今では、笹森先生の指揮にいちよまえの顔をして演奏しています。そして四街道SEにも加えて頂いています。こちらでも、いちよまえの顔をして参加しています。成島先生には無理を言っては歌いたい曲を編曲して頂いて歌わせて頂くという厚かましい事もしています。初心はどこへやら！

今は、一年でも長くこの生活を続けられますように願っています。

